

「初恋」と映画やドラマを「倍速視聴」する若者たち

浜田省吾氏に「初恋」という曲がある。アルバムのタイトル（「MY FIRST LOVE」）にもなっているのだが、女の子への淡い恋心を歌ったのではない。十代で夢中になったロックへの今も変わらぬ恋心（アルバム発表時、53歳）を歌った曲なのである。

ところで、4月に発刊された「映画を早送りで見ている人たち」（稲田豊史著）によると、映画やドラマを「倍速視聴」して、時間効率を重視する若者が増えているそうである。はずれを見たくない文化が強まっていて、はずれを見て損した気分になりたくないようだ。しかし、もともと映画を見て損した得したって何なのだろうか。「初恋」の歌詞に「今でも夢中になって追いかけている」とあるが、損得でロックを聞いたり映画を観るのでは感動もなければ夢中になりようもない。そもそも「はずれ」があるから、「当たり」があるのだと、少しだけ声を大にして言いたいところである。

さて、この何十年かの社会の有り様を考えてみると、無駄を省き合理的であることが、何より優先されてきた。合理性は経済社会においては絶対的な善である。そして、その考え方は教育や文化にも少なからず影響を与えたが、それは正しかったのか。今さら考えさせられる。

経済社会の価値観に従うなら、時間のコスパ重視の「倍速視聴」は必然だし、ネットの普及がその傾向に拍車をかけていると思える。合理的に考えると、インターネットは分からないことを調べるだけなら本当に速い。ただし、そこには寄り道がない。放送作家の永六輔氏は「インターネットで情報を集めるのは便利です。でも、あれは、現場の真ん中にヘリコプターで舞い降りるようなもの。そこに行くまでの状況はわかりません」と著書「伝言」（2004年刊行）の中で書いた。十年以上前になるが、新入生の学用品の購入一覧を作った際、電子辞書の購入に関して、ベテランの英語の先生が「紙の辞書の良いところは、調べたかったことだけでなく、全く関係ない情報も同じページに並んでいるところ。別の言葉に思わず引き寄せられて、興味関心が別のところに寄り道していくことも、生徒にとっては大切なこと」という風なことを話されたことを思い出す。教育の世界でも、合理性という名のもとで、失ったものは少なくないかも知れない。

映画「男はつらいよ」の監督山田洋次氏が6月11日の朝日新聞の記事で、引用したのが上野英信氏の「地の底の笑い話」（1967年刊行）。かつて炭鉱には仕事をさぼってブラブラしていても、みんなから愛されていた人がいたそうである。生きるか死ぬかの危険な現場で、「スカプロ」（スカッとしてブラブラしているからそう呼ばれていた）は周りを笑わせ和ませる存在だったので、スカプロがいると仕事はかどったとのこと。さらに落盤事故が起こった時には、スカプロがああしろこうしろと大声で指示をして大活躍したらしい。ぶらぶらしていたからこそ全体が見えていたのだろうが、山田氏は現場が合理化されてスカプロのような存在が許されなくなったと書いている。

声を大にして言いたい。持続可能な社会の実現のためにも、合理性優先や経済優先の功罪を考える時期に来ているのではないだろうか。

令和4年6月22日
大村城南高等学校長 中小路尚也